

きぶのたね

○ 孝子 國富 幸次郎 (その二)

NO105 月刊

第七輯 人物誌 第二十三号

昭和四十二年三月一日 発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町末町一三五字地方(呼電四三七番)
吉備 親老 協会

第104号 723

平野村 幸次郎
其方母長壽以段此度御巡村被遊以付
達 御聽依也青銅
貴文被下置以
御仁惠之程難有奉
致 猶此上心ヲ付可致
養育以
西十月

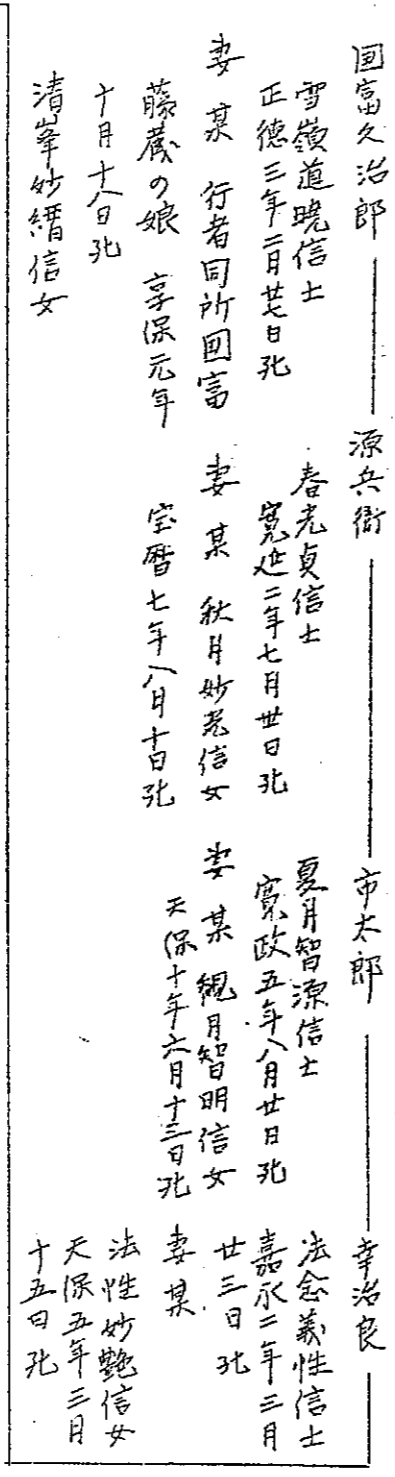
平野村 幸次郎
弟之被仰出候
御法令嚴重相守平日
老母を致大切農業出
精以段 此度御巡村被
遊以二付 達 御聽寄
特之儀に被思召以依
之為稱美青銅五貫
文被下置以尚此上明
々付老母江孝養農業
業可致出精以
西十月

申達 平野村 年吉
平日智得古宜殊農業
致出精以今般
達
御聽寄特事思忍依
之為目貴文被下置
以 猶
御法令筋嚴重相守農
業相働可申候
己九月

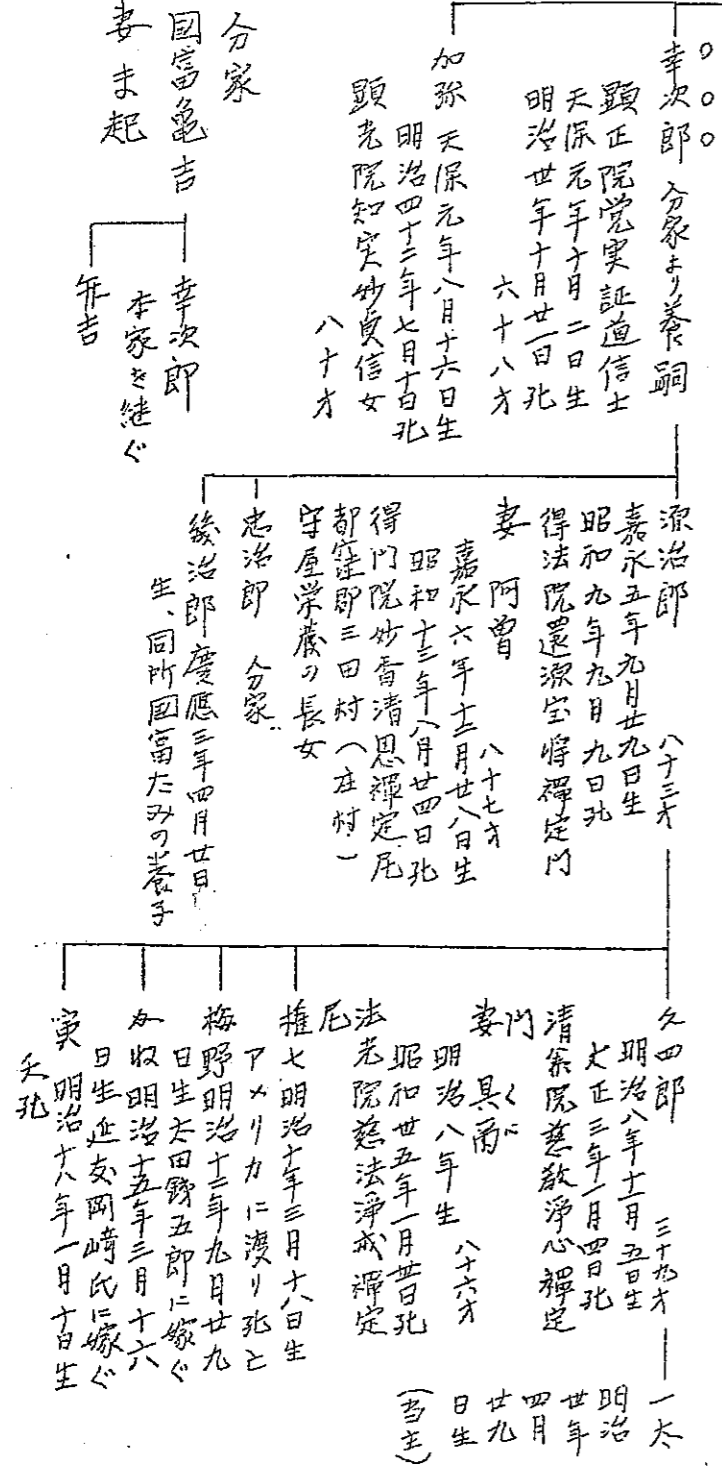
幸次郎は農業に勵み、且つ老母に孝養を盡し長壽を保つたので二十才の十月藩主から表彰されたのである。

古文書の年代は前後から推定し、西は嘉永二年己は安政四年に当る。

× 國富家系譜



× 分家



國富龜吉 幸次郎 本家を継ぐ 年吉

幸次郎 分家より養嗣
源正院覚実証道信士 天保元年十月二日生 明治廿年十月廿一日北 六十八才
加弥 天保元年八月十六日生 明治四十二年七月十日北
頭老院知実妙貞信女 八十八才

「天は人の上に人をつくらず、人は人をつくらず」といふ。人間は民主的平等が叫ばれ、そのが政界人といわず、総ぐるみに、その標準は低下し、自身は萬物の中にあり、心は萬物の上にあり。ということとは全く置き忘れたら、其の利益の本位となり、生命と財産、精神と肉体、目的と手段、との価値が錯綜して、まるで狂った時計のようになり、正確を欠く社会のなかで、お互に競り合つて、苦惱に喘ぎながら、日々の生活を送つてゐるのではないかと思われる。

○ 慈尊院禪人

姓は安井、名は熊女、号は碧流亭松翠といふ。關西地方における茶道表千家の宗匠である。慈尊院は都賀郡大福村米倉（福田村）の米穀問屋今田屋の出に於いて、明治五年十月廿二日の生れである。（今田屋は姓は今井氏にして豪商であつたが、相続人の慈尊院の望見が当時關山一流の料理松の江に出入し、藝妓にうつつをぬかし遊里に耽つて放蕩の限りを尽くし、身を持たず崩れて、驟身を誤り、ついに倒産してしまひ、現在は絶家してゐる）。長野の大地主安井萬龜夫に嫁し、なに不自由なく渡世して、たが良人は明治三十九年十一月十六日三十五才の若さで病死した。この時慈尊院は同じ年配であつた。その間男の子が生れたが、肥立が悪く夭折したので、跡目相続として養子に迎えたのが福田村大福の地主神崎棟太郎の次男重郎である。

慈尊院は幼時から三味線、琴、華道、茶道などを習ひ、私儀作法を身につけた。当時嫁入前の娘には、貧富の差はあるが大なり小なり家族を形成する上には欠くことの出来ない習慣であつたが、現代ではこうした心の中が、かたがたを培う私儀作法といふものは、さほど意を用ひず、ただ強く男女同權の理を主張するようになつた。

四三

慈尊院は良人萬龜夫がなきあとに専ら茶道に精進し、京都上京区小川頭本法寺前の不審庵表千家の流れをくむ即中有千宗左の教えを継いで、皆伝を極め、宗匠として關西地方にその名を知られ、師の教えを乞うもの數百人に達したといふ。慈尊院は三十五才から寡婦となり、専ら門下の教養に盡瘁し、傍ら家計を切り盛りして天寿を保ち、昭和四年の十二月十六日八十八才で死去した。

養嗣の重郎は明治四十三年五月九日の生れで、その配として邑久郡玉津村教居（邑久町）の旧家川野弥曾平の次女衣子を迎えた。つまり夫婦養子である。重郎は廿二才の時、五年間を費して、終つた支那事変は拡大して大東亞戰爭に突入した昭和十六年七月十四日召集され、満州に渡り、同廿一年三月一日黑河省で歿された。衣子はその時廿四才であつたが、養母熊女に仕えて茶道の伝授をうけ、宗匠としてその跡を継ぎ多くの門人を指導してゐる。



慈尊院 累系

安井姓 秋月院

岸正院

重造 温尊院

妻の忠孝院

安井氏の墓標

一 秋月院 道久

久太郎 即心院

即心院

金次郎 卓精院

妻の以上 夏月院

女大福村大神崎氏に嫁ぐ

琢郎 松下氏を嗣ぐ

惣太郎 信達院

宗達院

萬龜夫 温子院

妻 熊 慈尊院

（累代の墓標は不変院にあり 檀那寺は正善院である）

重郎 一平院

妻 衣子 玉津村川野氏の娘

妻 衣子 玉津村川野氏の娘 昭和十七年 大正四年七月十日生

安永九 庚子年

安永九 庚子年

七月廿日

安永七 戊戌年十一月廿四日

安永七 戊戌年十一月廿四日

妙性信女

寛政三年亥年九月十三日

即心院 宗円

即心院 妙達

（安井久太郎）

即心院 妙達

一 信達院宗達 文化九年戌年六月廿八日 安井惣太郎 夫婦墓
宗達院妙信 天保二年卯年五月廿七日 同人 妻

一 雄心院智道信士 天保十五年甲辰年六月十九日 俗名 安井仁蔵

一 実道院教意 安政四丁巳年四月廿三日 安井久七 行年 七十三才
実成院妙教 文久二年戌年二月十四日 同人 妻 行年 七十七才

一 温泉院正勤日到居士 明治十六年癸未四月廿三日 安井甚造 行年七十七才
惠光院妙照日勤大姉 明治三年庚午年十月九日 俗名 山野 行年五十八才

安井甚造は白藩時代旧中田村の年寄彼を勤めた。明治四年發藩置縣で年寄は伍長と改められ、叔倉勝弘が江戸に帰る際談別りして幕府に銘仕込みの武器を賜わり、また御目録百疋を拝領した家柄である。(一疋は鳥目十疋で、百疋は一疋文である)。

一 実兼院宗達日顯信士 大正十年十一月十日没 自安井家松下家養嗣子 松下琢郎 行年四十三才

一 貞精院秀照日達居士 大正十三年五月廿八日没 安井金次郎 行年 七十九才
真月院妙照日貞大姉 明治三十八年十二月廿四日没 行年五十九才
玉島町植岡文之助 長女 禮以

一 一平院教瞻日重居士 故陸軍歩兵曹長勲八等功七級安井重郎 昭和十六年七月十四日岡山第五十二部隊へ転移し満州第三九六三部隊に入隊す昭和十七年八月十日比島戦線に従軍し後歩隊以満州戦線に参加し黑河省に於て昭和廿一年三月一日行年三十七才にて歿す

一 温泉院篤実日満居士 明治三十九年旧十二月十六日 安井萬龜夫 行年三十五才
慈尊院妙実日操大姉 昭和三十四年十二月十六日 妻 安井 熊 八十八才

茶道ノ興義ヲ極メ碧流亭松翠ト稱ス 累代の墓石は日蓮宗蒙如山不變院内にあり。

△ 茶道は足利時代から盛んに行われ、最も栄えたのは豊臣秀吉時代である。堺の豪商の子で千利休にまつてその頂上に達した。始め茶の湯の好きを織田信長によつて茶党(茶坊主)に召かれたのが、後端となり、信長の死後は秀吉の保護を受け、諸大名の間に入出して名をなしたが、天正九年(一五九一)に秀吉の怒りに触れ、自決した。その原因は紫野大徳寺の山門へのうじばきの自分の本像を安置したとか、愛娘のお吟を秀吉が所望したのを拒んだとか、或は茶道に用いる名器を望外な口銭をとつて諸大名に売りつけたとか種々噂が流れてゐる。利休は町人の出だけに表面は智徳にみえるが心根は物質的欲望に拔け目がなかつたのではなかつたかと思はれる。

こうして茶道は利休の非道な最後とされたが、その流氷さうけてその高弟の古即織部、小堀遠州(政一)「遠州は関ヶ原戦后備中松山(高梁)代官となり十六年間に城した人で、この地方に多くの遺跡を遺してゐるし、や細川三育(中興)などに傳つた。遠州は將軍家老に聘せられた茶道の師範役になつた。

もと、茶道は精神の修養を眼目としたもので悲愴までには、いかぬが、最低の食生活のなかにあつてお人間としての美しさ、ゆたかさを思出すことにある。武士は戦場ではげしく切り合う白刃のもとを潜りながらほほえむ修練なのである。それがか次第に忠孝を主とする封建道徳の精神と結びつき、幕府はもとより諸大名の間に広く行われたのである。千利休の傳へる「わが茶は元禄時代はその子道庵と少庵、少庵の子宗旦になつて時の権勢に媚びることなく、京都を中心に私儀作法を旨と

した恭道が庶民の間に染えてきた。その子宗左が継ぎ、宗左の弟、宗室は卯宅の裏に住んでいたので表千家と裏千家の名が残った。また宗旦の子の宗才は別に武者小路千家を興し、利休の茶統は三千家に分れて今に至つたのである。しかして大名茶は財政的に衰えて町人の手に移り利休の精神である「和敬清寂」といつた礼儀作法は次第にうすれて、徒らに名器類や掛軸を茶にかけて形式的のみに流れくつてしまつたと云へるようである。

○ 孝女大飼きし女

川入の大飼初野の宅に左の古文書を保存してゐる。

川入村卯三郎 伴 勘太郎 後家 ぎし

兼て被仰出候 御法令 嚴重相守 舅 姑ニ心ヲ用山 致孝養

且農業出精候段 此度 御巡村被遊候付 達 御聴 寄特の

儀 被忍刀口以 被為 御 福美 青銅 五貫文 下置以 尚此上

心ヲ付一致出精以

酉十月 (嘉永二年)

(新ぬて仰せ出されしもの法令を嚴重に守り、舅(卯三郎)姑(卯三郎の妻)に仕えてよく孝道を盡し、またよく農業に力をつけていたので、此たが藩主が村々を御巡視なさつた際、この話を聴きになり、殊勝に思召されて御褒美のため青銅(唐金ともいふ、中国の法を伝えたので是の名がある。銅十二、鉛三を混ぜて造つたもので昔の一丈錢である)五貫文を贈る。尚此上とも孝養を盡すように。一貫は一十文である)。

きし女は文政三年三月十二日 赤沢村(いまは総社市)の農家守屋万吉の三女として生れ、川入村の農家大飼卯三郎の長男 勘太郎の后妻として嫁いだ。多時養父は健在であつたが結婚して間もなく生れた小藤夫が九才になつた弘化二年十二月十日日不幸にも夫の勘太郎は病氣かになつて死没した。勘太郎の年令は詳かでないが、きし女はこの時十六才であつた。先妻には子はなかつたが、若くして寡婦になつたきし女は悲境に陥つた。しかして居ることなく女手一つで農業に勵み、一家の経済を切り廻し遺子小藤夫の教育に努めた。また若夫婦に對しては孝養を盡した。嘉永二年十月、きし女が三十才の時藩主から農民の模範として前記の通り表彰されたのである。此から四年後に養父は死し、更に六年を経て養母も他界してしまつた。小藤夫は長じてすむに廿三才に達し、大石村小山(高松町)の何某の娘、某と云うを妻に迎えて幸福な家庭にはいつてゐた。きし女は長命して明治廿一年五月十八日六十九才で没した。

× 小藤夫は(幼名小平夫)成長し明治の初年には村民から選ばれて副戸長を勤め、戸長の大飼当弘(通稱は豊太郎といふ大養 毅の実名)を神佐して村政の向上に盡した。小藤夫の入組はいうまでもなく母きし女の教育にせからしむる所であつたようである。小藤夫は明治廿八年四月十三日六十九才で死去したが子福者にして五男一女に恵まれ長男卯太郎が宗家を継ぎ、子孫は川入一。六番地に住してゐる。

(当家は代々日蓮宗にして中正院の檀家であつたが、いまは不養院に移つてゐる。中正院はもと不養院塔中寺の正善院の西隣にあつたが、明岩中期に現在の所へ移つた。この敷地はもと庭殿藩の刑務所のあつた處である。昔多くの罪人が刑罰に處せら

た場所なので詰づることき嫌い、不変院にかえたとソウ。

大銅家系譜

大銅卯三郎

遠善院静直信士

嘉永六年十月十四日死

妻 某 惠老院妙善信女

安政六年十月廿九日死

空山院常照信士

弘化乙三年十月十九日死

妻 某 長受院妙久信女

天保四年癸巳十月十日死

小藤太 川入村副中長

諱讓院台照信士 六十九才

天保八年八月十五日死

明治廿八年四月十三日死

妻 某 諱退院妙操信女 八十五才

天保十二年生

大正十二年十月二日死

大石村小山何某の娘

赤波村守屋万吉の三女

信妻 キレシ 六十九才

鷲山院妙入信女

文政三年三月十二日死

明治廿一年五月十八日死

卯太郎 慈修院厚徳信士 六十七才

安政六年十二月十四日死

大正十四年二月廿八日死

妻 孤馬 慈瑞院妙徳信女 八十才

慶應二年七月十八日死

昭和二十年七月廿五日死

輕部村江口台平の長女

蒸アメリカに渡り昭和十七年二月廿七日病死絶中

次郎 昭和廿九年二月廿三日死 五十九才

妻 初野 明治四十年十二月廿八日死

日相西組 森安常吉の長女

基 昭和三年二月十日生

誠子

快

時子

川入百六番地に住す

雄三郎 慶應元年二月六日生

同所大銅美代次の養嗣

敬 明治二年五月九日生

龜五郎 明治九年十月二日生

節 明治十四年一月一日生

孝子回富幸次郎

平野四百五十九番地に住す。回富一太は先祖の幸次郎、年吉などが庭瀬藩主から賜わつた墨付四通りの古文書を伝えらる。回富家は旧幕時作同村札場(札場とは御缺を高くかかげる往還の人々に指示した所、高札場)と云う處に住してゐたが、明治廿六年山陽鉄道敷設のため庭瀬駅構内用地に買収され此處に移つたのである。

(おわり)この項未完

平野村

幸次郎母

ま起 八十四才

此度 御巡村被遊以付長
身以段 達 御聽依之青
銅或百貫文 被下置以

西十月

ホシダサトシ
スニダサトシ

平松モーターズ

各種二三輪
販売、修理

吉備局電二五三番・有線一〇九番

吉備町・中田

吉備町・下撫川



栗原仙太郎商店

吉備局電一七一番・有線九一〇九番